

メルマガ 「いいテク・ニュース」 季語に遊ぶ 2021年1月21日 (Vol.163)

「歌川広重『東海道五拾三次』保永堂版と俳句一其ノ参 藤枝（静岡県）から白須賀（静岡県湖西市）まで」

「歌川広重『東海道五拾三次』保永堂版と俳句一其ノ参 藤枝（静岡県）から白須賀（静岡県湖西市）まで」



https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Tokaido32_Shirasuka.jpg

東海道五拾三次之内 参拾貳番目 白須賀 汐見阪図

歌川広重『東海道五拾三次』の三回目です。

今回は藤枝から白須賀までを紹介します。

川越しの場面が多く登場します。

江戸時代は江戸防衛という軍事的な理由と、夏季の増水期に耐えうる強固な橋脚建造技術がなかったことと財政的な要因から、基本的に大河川は架橋されませんでした。

そのため、川越しの際は渡舟に頼るか、比較的浅い河川では徒歩（かち）渡りを強いられるという難儀な旅でした。

五拾三次中、舟を用いた河川は六郷川、馬入川、富士川、天竜川、横田川です。

ただし六郷川は当初は架橋されていました。

徒歩渡りは酒匂川、興津川、安倍川、瀬戸川、大井川、草津川。

また、海を越える場所は二カ所あり、「今切れの渡し」は「舞坂」から「荒井」までの一里半で「一里の渡し」とも呼ばれ、もう一つは宮（熱田）から桑名までの「宮の渡し」で海上七里におよぶ船旅で、順風でも七時間を要し「七里の渡し」とも呼ばれました。

そんな困難な旅路でもそれを上まわる意欲と楽しみがあったことを感じながら、「藤枝」から「白須賀」までの旅をご覧ください。

23. 藤枝 人馬継立 (じんばつぎたて)



https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Hiroshige23_fujieda.jpg

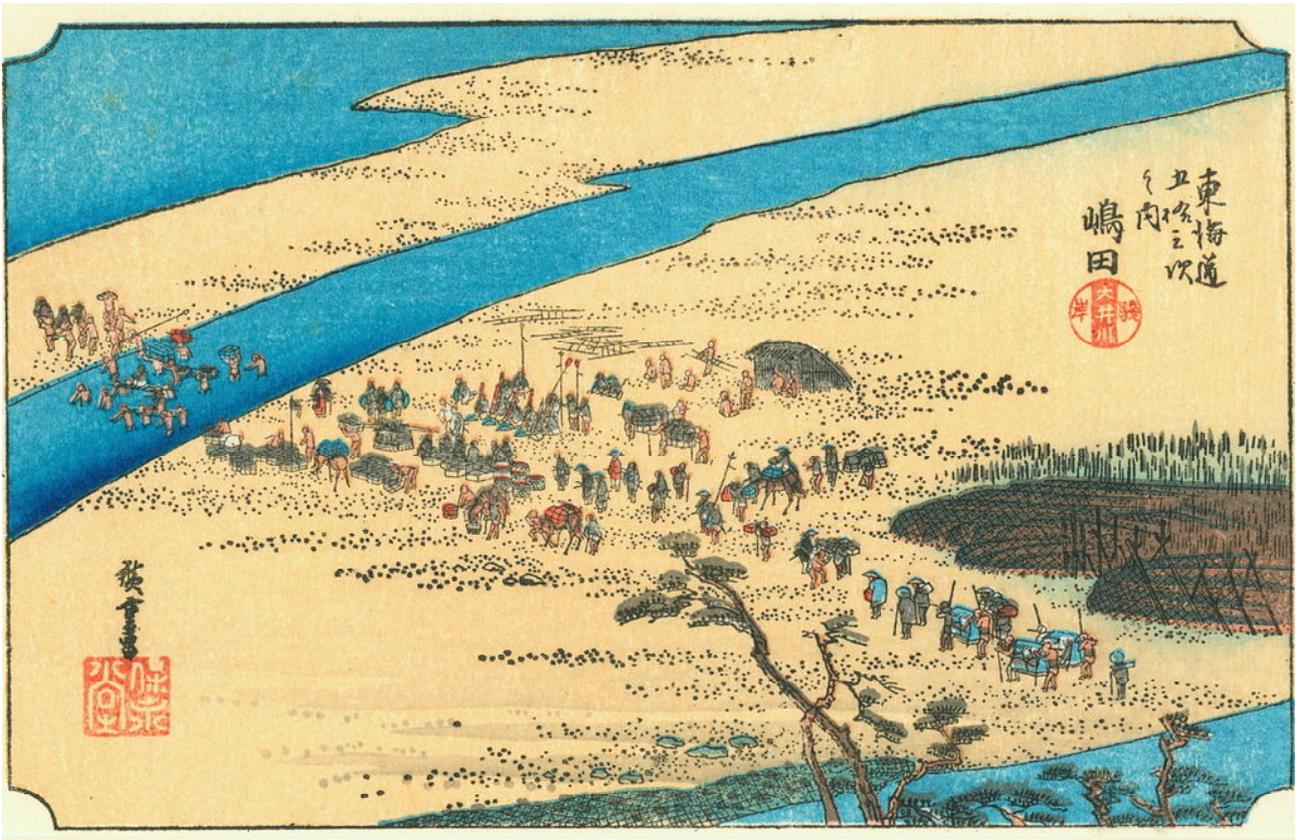
東海道五拾三次之内 貳拾貳番目 藤枝 人馬継立

「人馬継立」とは東海道などで運ばれる荷物の人足や馬を替え、引き継いで送ってゆくことです。この絵の舞台は問屋場と呼ばれた藤枝の中継所です。画面右上の大人の肩までありそうな高い床の上に座っているのが問屋場の役人です。背中を丸めて、上体を乗り出す姿は職務に対する責任感を漂わせています。黒羽織を着た武士が人馬の受け継ぎを監視し、記録する帳付（ちょうつけ）が帳面片手に立ち働いています。荷物を運んできた人足たちは、手拭（てぬぐい）で背中の中汗をふいたり、手を頭のところにおいて汗を押さえていたり、思い思いに疲れを癒しています。一方、これから荷物を運ぶほうのグループの人足が担ぐ長持には「保栄堂」と書かれた札が見えます。また馬の腹掛けには保栄堂の主人竹内孫七にちなんだ「竹内」とあり、しっかり宣伝しています。全体の構成は大きな逆「く」の字の線を描き整然とした印象を生んでいます。ここでは荷物を運んできた人足に注目し、「汗」を詠んだ句を選びました。

汗の人ギューツと眼をつぶりけり（眼＝まなこ）

京極杞陽(きょうごく きょう) (1908-1981)
季語<汗>で三夏

24. 嶋田 大井川駿岸 (すんがん)



https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Hiroshige24_shimada.jpg

東海道五拾三次之内 貳拾参番目 嶋田 大井川駿岸

「駿岸」とは駿河側の岸という意味で、川を渡れば遠江国（とおとうみのくに）です。大井川は川幅十二町（約 1.3 キロ）といわれ、徒行（かち）渡ししか許されない東海道屈指の難所でした。

その様子をかなり高い視点から俯瞰（ふかん）した構図で、豆粒のような人々が、113 人も描かれています。

弓や槍などを持った武士の姿が大名行列を示しています。

人足たちは裸で、輦台（れんだい）や肩車で客を渡す者、駕籠や長持を担ぐ者、河原でひと息入れる者など生き生きと描かれています。

この絵は青の使い方が特徴的です。

人々がかぶったり、脱いだりしている笠がすべて青で描かれています。

笠はふつう黄色で描かれるのですが、河原を黄色で描いているため、同化しないように工夫され、点々と配される青い笠は、河原の黄色い面にアクセントを与えています。

ここでは大井川の水流が比較的少なくなった秋口の川を詠んだ句を選びました。

秋風や水かさ定まる大井川

小林一茶(こばやし いっさ) (1763-1828)

季語<秋風>で三秋

25. 金谷 大井川遠岸（えんがん）



https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Hiroshige25_kanaya.jpg

東海道五拾三次之内 貳拾四番目 金谷 大井川遠岸

前図の「大井川駿岸」から「遠岸」すなわち遠江（とおとうみ）側の絵です。嶋田からの大名行列の先頭集団が大井川を渡り終え、これからかなたの山裾に見える金谷宿に向かっていこうとするところです。川を渡り終えた人足たちは、疲れ果てて、座ったり、横になっている者もいて、徒行渡しの苦勞が伝わってきます。大名行列の大井川越えを二図連続で取り上げ、同じような俯瞰構図で描いています。二図が似てしまいそうなところですが、遠景にごつごつとした山を色分けして描き、近景の黄色の砂洲とコントラストをなしています。人物描写では、駕籠を大きな輦台（れんだい）に乗せて川を越してゆくさまが目を引きまします。この輦台は四方に高欄（手すり）が付いたもので、大名や貴人を駕籠に乗せたまま運ぶのに用いられました。ここでは遠景の山まで広がる砂洲を詠んだ句を選びました。

日の砂洲の獣骨白し秋の川

藤沢周平（ふじさわ しゅうへい）（1927-1997）
季語＜秋の川＞で三秋

26. 日坂 佐夜ノ中山



https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Hiroshige26_nissaka.jpg

東海道五拾三次之内 貳拾五番目 日坂 佐夜ノ中山

東海道中でも起伏の激しい道が続く佐夜（小夜）の中山峠です。
墨色の峠の斜面と淡いクリーム色の街道が美しい対比をなしています。
舞台は下向きにカーブする峠道です。

その峠の最下部あたりに恐竜の卵のような大きな石があり、五人の旅人が丸い石を不思議そうに眺めています。

これは「夜泣き石」と呼ばれ、石には「南無阿弥陀仏（なむあみだぶつ）」の文字が彫られています。
その昔、妊婦がこの石のそばで殺され、その際に赤ん坊が生まれ落ち、赤ん坊を思う妊婦の霊がこの石に乗り移り、以来、この石が夜泣きしたといいます。

石の左側の紺の合羽（かっぱ）の男は興味津々といった感じで見えています。
対して石の右側の子連れの子連れは石から少し離れて丁重に頭を下げ、子供は石を見ず母親の顔をしげしげと眺めている姿にも実感があります。

昼は寝て夜泣きの石や吾亦紅（吾亦紅＝われもこう）

宮坂静生（みやさか しずお）（1937-）

季語＜吾亦紅＞で晩秋

27. 掛川 秋葉山遠望



https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Hiroshige27_kakegawa.jpg

東海道五拾三次之内 式拾六番目 掛川 秋葉山遠望

掛川宿から西へ行くと二瀬川（ふたせがわ）に架かる大池橋に至ります。
この絵はその大池橋。
この橋を渡ると、東海道からわかれて秋葉山（あきばさん）へ行く道があり、火伏（ひぶせ）の神として知られています。
画面右上はその秋葉山です。
橋が左斜め上から右下に伸び、画面を二分割する構図です。
橋の上では、夫婦らしき二人連れの老人が向こうから来る老僧に頭を下げています。
特に老婆の方は腰を折り曲げ、全身で敬意を表しています。
裸足の子供の踊るような愛らしい動作と若い僧のユーモラスな表情がなごやかな雰囲気を醸し出しています。
画面上部では丸凧が枠を突き破るのはNo14「原 朝の富士」と同様の趣向です。
糸が切れて吹き飛んでゆく凧も遠くに見られます。
凧揚げは掛川周辺の名物で、旧国名の遠江（とおとうみ）にちなんで遠州凧（えんしゅうだこ）と呼ばれ、旧暦五月端午の節句のころに行なわれました。

凧百間の糸を上りけり（凧＝いかのぼり、百間＝ひゃっけんで約 180 メートル）

河東碧梧桐（かわひがし へきごとう）（1873-1937）
季語〈凧〉で三春

28. 袋井 出茶屋ノ図



https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Hiroshige28_fukuroi.jpg

東海道五拾三次之内 貳拾七番目 袋井 出茶屋の図

広重は時々、宿場や名所から外れた場所を描いています。この絵もその一つで、榎（えのき）の陰に傍示杭（ぼうじぐい）が見え、ここが袋井宿の東西いずれかの境とわかります。街道にはちょっとした木陰を利用して土盛りをし、葭簀張（よしずばり）の屋根の出茶屋がありました。赤銅色（しゃくどういろ）の大きな薬缶（やかん）にわかづくりの竈（かまど）で湯を沸かし、店番の婆さんが火箸（ひばし）で火の具合を見えています。煙がもくもくと立ち上がっている中、駕籠かきは平気で煙管（きせる）に火をもらっています。駕籠かきの相方（あいかた）は駕籠の中に座りこんでいます。相方同士に反対側を向かせて、かえって臨場感を高めるのは、広重お得意の描写です。いまひとりの旅人は道中差しを突出しながら一服。右手に目をやりながら、くつろいだ表情を見せています。画面右およそ三分の二を開放的な空間にし、遠方の農夫がひとり馬をひいている姿だけが小さく見え、われわれの目を画中に引き込む工夫をしています。

婆々が茶屋夜は虫鳴く處哉（婆々＝ばば、處＝ところ）

正岡子規（まさおか しき）（1867-1902）

季語＜虫鳴く＞で三秋

29. 見附 天竜川図



[https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Tokaido28 Mitsuke.jpg](https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Tokaido28_Mitsuke.jpg)

東海道五拾三次之内 貳拾八番目 見附 天竜川図

天竜川の舟渡しの情景を描いています。

天竜川は川の瀬が中洲で二つに分かれ、大天竜・小天竜と呼ばれていました。

中洲では、広重が好んだ「顔を見せない」二人の船頭がたたずんでいます。

中ほどには大名行列が小さく見えますので、彼らを渡し終え、手前の船頭たちがひと息ついているのでしょう。

川舟は舳先（へさき）が高く上がって底が平らな高瀬舟と呼ばれるもので、一度に 25 人くらいは乗せていたと言われていました。

一見平凡そうな絵に見えますが、舟と岸の線が交差し、複雑な構成をしています。

川の向こうには森が見えますが、墨の濃淡によって、川霧に包まれた状態と奥行きを表現しています。

中ほどの岸边にいる大名行列と手前の船頭二人に距離を取っており、この距離感によって、大勢の人でざわめく遠くの岸边をよそ事眺めている感じが描写され、日常の中にある旅情をとらえています。ここでは天竜川と船頭の一人が突き立てている水棹（みさお）を詠んだ句をあげました。

天龍の涸れし流に水棹突く

百合山羽公(ゆりやま うこう) (1904-1991)

季語<涸れし流=川涸る>で三冬

30. 浜松 冬枯ノ図



https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Hiroshige30_hamamatsu.jpg

東海道五拾三次之内 貳拾九番目 浜松 冬枯ノ図

焚火を中心に憩う人々をとらえた図です。

季節は冬で空に施された藍色が寒さを表現しています。

構図は中央で立ち昇る焚火の煙と杉の木が縦に伸び、これと交わる水平線上に宿場の家々や浜松城が並ぶ十字構図です。

杉の木の左側では駕籠かきと思われる四人の男が火を囲み、一人は煙管（きせる）をくわえながら背中まで上着をまくりあげて背中や尻をあぶっています。

右側の合羽（かっぱ）姿の旅人はさすがに少し身を引いている感じですが、口元には微笑みが浮かび、なごやかな空気を物語っています。

赤子を背負った女は枯れ葉を集めているのでしょうか。

画面右手には立て札があり松林が描かれています。

これはかつて將軍足利義教（あしかがよしのり）が富士見に向かう途中、この松の下で酒宴を張り「浜松の音はざざんざ」と謡ったので、以来「ざざんざの松」と呼ばれ、浜松城とともに浜松の名所です。

この絵では浜松城や「ざざんざの松」に頼るよりは、普通の人々の振舞いを中心テーマに据えています。

ここでは「枯れ」を詠んだ句を選びました。

ことごとくやさしくなりて枯れにけり

石田郷子（いしだ きょうこ）（1958-）

季語＜枯れ＞で三冬

3 1. 舞坂 今切 (いまぎれ) 真景



https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Hiroshige31_maisaka.jpg

東海道五拾三次之内 参拾番目 舞坂 今切真景

かつて浜名湖は舞坂と対岸の荒井（新居）まで続く砂洲によって仕切られた湖でした。ところが室町時代、明応七年（1498年）の大地震によって海との境の砂洲が決壊し、浜名湖と遠州灘がつながってしまいました。

この砂洲が切れた所を「今切」といい、以来舞坂と荒井は船渡しとなりました。

江戸幕府は遠州灘の荒波から渡し舟を守るために、波除杭（なみよけぐい）や潮除堤（しおよけづつみ）を築いたりしました。

絵の手前左に描かれているのはこの波除杭で、稚松（ちまつ）の生えているのが潮除堤です。

右端には蓆（むしろ）で作られた粗末な帆が見え、湖面には浅蜷（あさり）でもとっているのでしょうか、舟が小さく描かれています。

湖面の水平線は濃い藍色は下方へとぼかされ、静かに光をたたえています。

画面中心に湖上に浮かぶ山が描かれていますが、実はこうした山は存在しませんが、確かな存在感でわれわれの目の前に広がり、右遠方の真白に映える富士山を強調するために、広重が描き加えたものです。

副題の「今切真景」は広重の「今切心景」だったのかも知れません。

浜名湖や巽に望む小春富士（巽＝たつみ、東南の方角）

鈴木花蓑（すずき はなみの）（1881-1942）

季語＜小春＞で初冬

3 2. 荒井 渡舟ノ図



https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Tokaido31_Arai.jpg

東海道五拾三次之内 参拾壹番目 荒井 渡舟ノ図

この絵も「舞坂」に続き今切の渡しを描いています。

対岸の右手の方に見えるのが荒井の関所で厳しい取り調べで知られていました。

画面中ほどを進むのは大名の御座船（ござぶね）で、幔幕（まんまく）を張り巡らし、白熊槍（しろくまやり）や吹き流しを揚げています。

これに続くのが中間（ちゅうげん）と呼ばれる供の者たちを乗せた船です。

「舞坂」では景観の表現がテーマとなっていました、この「荒井」では中間たちのくつろいだ様子が描かれています。

いかめしい設（しつら）えの御座船はもうすぐ荒井の関所だという緊張感を高めています。

対して、中間たちは丸くなったり、首をがっくりと垂れて居眠りをしています。

特に目を引くのは鼻の穴を広げ左手を突きあげて大あくびをする中間です。

関所での取り調べ前のひとときの安らぎを描き、心地よい天候をも間接的に表現しています。

遠州は風の国とぞ幟立つ（幟＝のぼり）

米谷静二（よねたに せいじ）（1921-1989）

季語＜幟＞で初夏

3.3. 白須賀 汐見阪図



https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Tokaido32_Shirasuka.jpg

東海道五拾三次之内 参拾貳番目 白須賀 汐見阪図

東海道中でも一、二を争う絶景で知られた遠州灘を望む白須賀、汐見坂です。白須賀宿はもともとは海沿いにありましたが、大津波で壊滅したため高台に移されました。汐見坂はもとの宿場があった場所から移転後の白須賀宿に行く途中にあります。坂を下る大名行列の姿が描かれていて、列をなす人々の笠が並んで、どことなく可愛らしく感じられます。眼前には遠州灘が広がり、青い海原は坂道からパッと眺望できる快感を味わうことができるように工夫されています。この構成の特徴は海が窪地の上にぽっかりと顔を出したように見えることです。左右の斜面の松がフレームの役割を果たし、見る者は窓から海を見ているような感覚も味わえます。また配色も手前の斜面と松は薄墨、その向こうの斜面は暗緑色、海面は藍色から白にすることで海がいつそう際立って見えます。ここでは薄墨色の斜面と藍色から白の海面に注目して句を選びました。

末黒野を来て海原に真向へり (末黒野=すぐろの、枯れ草を焼いて一面に黒くなっている野原)

大串章(おおぐし あきら) (1937-)
季語<末黒野>で初春

私も白須賀名物の柏餅を詠んでみました。

汐見茶屋力をもらふ柏餅

白井芳雄

季語<柏餅>で初夏

今回は「歌川広重『東海道五拾三次』保永堂版と俳句一其ノ参 藤枝（静岡県）から白須賀（静岡県湖西市）まで」をお届けしました。

全体を通じての参考文献、出典：安村敏信・岩崎均史著

『広重と歩こう 東海道五十三次』（小学館）（2000年）
ISBN4-09-607001-7

町田市立国際版画美術館監修・佐々木守俊解説

『謎解き浮世絵叢書
歌川広重 保永堂版 東海道五拾三次』（二玄社）（2010年）
ISBN978-4-544-21201-3

小林忠・前田詩織解説

『歌川広重 東海道五十三次五種競演』（阿部出版）（2017年）
ISBN978-4-872-42443-0

新田時也編著・志田威・中澤麻衣著

『東海道・中山道 旅と暮らし』（静岡新聞社）（2019年）
ISBN978-4-783-81091-9

飯田龍太・稲畑汀子・金子兜太・沢木欣一監修

『カラー版 新日本大歳時記 愛蔵版』（講談社）
ISBN978-4-06-128972-7

『角川俳句大歳時記 新年』（角川学芸出版）

ISBN4-04-621035-4 C0392

『角川俳句大歳時記 春』（角川学芸出版）

ISBN4-04-621031-1 C0392

『角川俳句大歳時記 夏』（角川学芸出版）

ISBN4-04-621032-X C0392

『角川俳句大歳時記 秋』（角川学芸出版）

ISBN978-4-04-621033-3 C0392

『角川俳句大歳時記 冬』（角川学芸出版）

ISBN4-04-621034-6 C0392

本間美加子

『日本の365日を愛おしむ』（東邦出版）
ISBN978-4-8094-1652-1 C0076

参考サイト：フリー百科事典ウィキペディア (Wikipedia)

最後までお読みいただきありがとうございました。

(株)技術情報センター メルマガ担当 白井芳雄

本メールマガジンのご感想や本メールマガジンへのご意見・ご要望等 melmaga@tic-co.com まで、
どしどしお寄せ下さい。

株式会社 技術情報センター 〒 530-0038 大阪市北区紅梅町 2-18 南森町共同ビル 3 F

TEL : 06-6358-0141 FAX : 06-6358-0134 E-mail : info@tic-co.com